

日臨技が創造する臨床検査技師の未来構想

臨床検査を社会の中で活用するために

◎滝野 寿¹⁾一般社団法人日本臨床衛生検査技師会¹⁾

【はじめに】2023年6月、一般社団法人日本臨床衛生検査技師会は、創立70周年、法人化60周年を迎えました。会員数も7万人を超え、臨床検査技師の職能団体として確固たる地位を築き上げました。今後も継続して臨床検査業界を牽引し、医療を支える人材を確保・育成していかなくてはなりません。さらなる業界の発展を目指すために、現状想像しうる最大限の可能性を引き出し、その実現に向けた検討を、継続して行わなくてはなりません。新しい科学やテクノロジーの成長には、未来を語る多様な予測の言説の働きが欠かせないからです。それにはAI（人工知能）の能力が、人間のそれを超えると予測されている2045年ごろを生きる若者に、自分たちの未来を創造し、想像してもらうことが重要であると考えました。彼ら彼女ら若者の発想が、同年代の仲間を刺激し、その結果多くの人共感すれば、期待は膨れ上がり、他方プロジェクトの推進力になるのではないかと期待して、当会では日臨技における「第二次未来構想」のあり方について取りまとめることとしました。

医学をはじめ、科学技術の進歩は著しい。今後、今までにないスピード感で、それらを実用化していくためのアイデアが必要になると思われます。現状を把握・分析し、問題を見つけ、アイデアを生み出すことは容易ではない。しかし、その過程で、使える過去のデータを応用することによって、言語化しにくい経験や技師の感覚に頼っている技術の学習にディープラーニングを重ねれば可能（実現）となることも多いのではないかと考えます。これら加速度性と波及性が新たな時代を創るものと思われます。例外なく、臨床検査技師も時代の波に乗り、進化していかなければなりません。『最良の医療技術、医療人としての心』を原点とし、今後は、本会のみでなく、臨床検査業界を支える若きエネルギーが、必ずや世界、宇宙、未来へ、この情熱を『発信』し、そして受け継いでいってくれるものと信じています。将来必要となる人材像の考え方を整理したことに触れた上で、「検査技師は、医療だけでなく社会全体への進出や、多分野での職域を確保していかなければならない状況に立っている」と考えます。

【未来構想WGの検討】当会で将来検討を行ったのは初めてではありません。過去には平成25(2013)年 第一次未来構想策定に関する検討会（戸塚実委員長）、翌26年第4次マスタープランが策定されました（富永博夫委員長）。その後プランに則って組織運営が成されました。平成31(2019)年には「将来に向けての臨床検査技師のあり方」（丸田秀夫委員長）が、そして「コロナ禍での組織運営及び第4次マスタープランの検証」（丸田秀夫委員長）により総括されました。そして、今回、当会では急速な人口減少により想定される日本社会の諸問題と、それに向き合う臨床検査技師の未来をどう切り拓くのかを検討するために、若手技師を中心としたメンバーにより第二次未来構想が策定されて、宮島会長宛に提出しました（菊地良介委員長）。未来構想WGには多様性に充ちた若い人材を集め、アイデアを募り、行動を起こすにはどうしたら良いのか、臨床検査から社会を変えようという視点で積極的に議論を重ねました。当会では、この答申を基盤として日臨技運営改革推進会議を設置し、「次世代人材育成プロジェクト」ならびに第5次マスタープランを策定する方向です。具体的な検討・答申内容については、各演者より報告します。

【まとめ】急速な人口減少が想定される中、当会では若手を中心として「日臨技未来構想」について検討しました。今後、執行部としては提案された内容を基として、新たな臨床検査技師像と職域拡大など臨床検査技師の未来をどう切り拓くのか、またそれら構想を推進するための事業を創生することとしています。30歳～40歳の若者が中心となって策定した「未来構想」の中では、“夢物語”と比喻されるものもあるかもしれませんが、一方で期待も大きいです。2040年に確実に臨床検査業界のトップリーダーである若者の自由な発想を、我々は邪魔をせず環境を整える手助けをしなくてはならないと考えています。